

特集 英語を学ぶ視点の育成

家庭での 自主学習と教科書

— 学習方法の視点から

竹内 理 (関西大学)



1. はじめに—カギは家庭での自主学習

「中学の教科書には英語の基礎がすべて詰め込まれている」とよく言われる。しかし、いかによい教科書であっても、そして、いかに技量と熱意のある教師が教えようとも、生徒みずからが教材に働きかけ、これを自分のものにする(=内在化する)努力を行うことなしには、英語の基礎学力はついてこない。英会話学校へ通うだけでは英語力が身につかないのと同じだ。しかし、このような内在化には、かなりの時間をかけた学習が必要になる。毎日たくさんの時間を英語に割くことはできない学校での学習だけでは、残念ながら、到底達成しえない時間数といえよう。そこで、家庭での自主学習がどうしても必要となってくる。本稿では、この自主学習に焦点をあて、2006(平成18)年度版 *NEW CROWN* (18NC) の活用法を考えてみたい。

2. 「基本文の定着」と「音と文字の関係強化」

実践的な英語を習得することが中学にも求められるようになったため、どうしてもリスニングやスピーキングに我々の目は向かいがちである。しかし中学英語には、これからの多種多様な英語学習に耐える基礎力の育成も強く求められているのである。また小学校の英語活動の影響で、音には慣れているが文字はこれから、という生徒も多くなると予想される。そこで、「基本文の定着」と「音と文字の関係強化」が特に大切な課題となる。これに加えて、定着した基本文をアウトプットへと転化していくような活動も必要となる。

3. 基本文の定着

基本文を内在化するためにお奨めの方法は、やはり教科書本文の音読であろう。しかし、ただ音読するだけではあまりにも単調で、よほどの忍耐力がない限り長続きしない。誰も強制しない自主学習ではなおさらのことだ。そこで、単純な音読は数回にとどめておくのがよいだろう。18NCでは、リスニングで重要事項を導入している上に、サウンド・アドバイスのコーナーもあるので、授業中の音読指導とあわせると、家庭での単純な音読活動は3~4回で十分なはずだ。なお、音読をする際には文章を覚えようとしめないことも大切だ。覚えようとする、音読自体への注意がおろそかになり、滑らかに読むことがなかなか実現できなくなる。結果として覚えていたらよい、という姿勢で活動に取り組むよう、生徒に最初から説明する必要がある。

スムーズに音読できるようになったら、次はRead & Look-up形式での音読へと進むよう助言してはどうだろうか。長めの文は、意味のカタマリごとにスラッシュを入れておき、そこまで一気に読む。そのあと、読んだ部分を、テキストを見ることなく、顔をあげて復唱する。数回の練習ののち慣れてきたら、ピリオドまで一気に読み進んで文単位のRead & Look-upに挑戦する。スラッシュを入れる活動は授業中に済ませておくと、自主学習に効率よくつなげていけるだろう。このあと、余裕のある生徒には、Listen & Repeatに入ることを奨めたい。音読やRead & Look-upの活動で文章が十分にリハーサルされているので、大きな負担を感じずにできるはずだ。

4. 「音と文字の関係強化」

複数の活動で十分に練習したあとは、和訳から英文を口頭で再現してみる活動はどうであろうか。最近、和訳は目の敵にされているが、英文をしっかり和内在化したあとで使えば害にはならない。要はそれが目的にならなければよいのだ。なお、和訳が目的にならないようにするためには、先渡しで和訳を配付するのが望ましい。

音読やそのバリエーションがおわり、基本文が自分のものになったら、次は和訳を利用して、教科書の英文をノートに再現してみる。音声と文字をつなげる筆写活動は意外と難しいが、スペルや句読法にも意識を向けることができるため、自主学習法にぜひ加えて欲しいものである。この際、WORDSに出てくる単語を先に学習してから活動に入ると、やりやすくなるだろう。なお、単語を学習する時には、アクセントのあるところを意識しながら必ず声に出し、何度も繰り返して書く。つまり、記憶の多重経路化と身体化を行うよう助言しておきたい。

5. Slow Learner はどうする

ここまでの学習を家庭でやるのは大変なことかもしれない。Slow Learner の場合はなおさらであろう。そんな時は、POINT や Talking Point に出てくる基本文まででもよい。あるいは、CHECK IT や Practice で学習する基本文のバリエーションまででもよい。対象文の数を限定して自主学習をさせてみてはどうだろうか。18NC では、基本文とそのバリエーションが厳選されているため、これらが身につくだけでも、大きな自信となるに違いない。家庭での自主学習は、画一的にやる必要はない。むしろそれは避けるべきであろう。すべてをこなせる生徒と、一部分のみを繰り返しやったほうがよい生徒を区別することは、自主学習推進のためにきわめて重要である。

6. アウトプットへつなげたい

基本文が蓄積されてくると、次はこれらを活用して表現する学習をさせてみたい。最初は、WORD BANK や WORD CORNER などに出てくる単語を利用して、基本文中の単語を置き換える程度の活動

になるかもしれない。しかし、言いたいことや身の回りのことを、基本文を使い表現してみるように求めることは、インプットの活動と同じぐらいに大切なことである。たとえば、1週間に3～4文でも構わないから、家庭で英文を書くように奨めてみてはどうだろうか。これをクラスで発表させるような活動とうまくつなげることができれば、学習動機も高まるだろう。なお、作文の際には、その内容を生徒がおかれている環境とできるだけ結びつけるように指導するとよい。また、18NC はコンテンツが充実しているので、教科書の内容と関連づけて、感想や意見を書かせるというのも一案かもしれない。

仕上げは、定着した基本文をコミュニケーション場面で使わせることだ。使用機会がないものには学習意欲は湧いてこない。使用機会増大のために、英語を使うことが自然と思える環境をできる限り増やしていくことが望まれる。E-mail やテレビ会議などを授業で導入するのもよいだろう。家庭での自主学習を生かす機会をできる限り拡大するよう、「環境」と「足場」の提供が強く求められている。

7. 評価をブースターに

自主学習の最大の課題はやる気を持続させることにある。そこで自主学習ノートのようなものを作らせてみてはどうだろうか。これに各自の活動やアウトプットを記録させ、ポートフォリオ的に関心・意欲・態度を評価する。テストでも基本文をしっかりと身につけた生徒が高い得点をとれるようにして、自主学習を重要視しているというメッセージを送る。音読テストのようなパフォーマンス・テストを導入するのもよいであろう。評価をうまく促進剤として利用し、学習の継続性を高めてほしい。

8. おわりに

教室内の魅力あふれる授業と、これを補う家庭での継続的な自主学習。どちらも学習の成功には欠くことのできないものである。教室だけで英語を学ぼうとしても、決して学び切れないことを生徒にはっきりと説明し、家庭での教科書利用法をくわしく教えて、挑戦させる。自律学習の大切さが叫ばれる今、こんな学びの視点も重要ではないだろうか。

HORIZUMI
HAMORU

TAKAHASHI
SADAO

LYNNE
PARMENTER

MORINAGA
MASAHARU

TAKEUCHI
OSAMU